



Title	『讃岐典侍日記』下巻の成立背景：堀河天皇の追慕と天皇の代替わり
Author(s)	丹下, 暖子
Citation	語文. 2010, 94, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69149
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『讃岐典侍日記』下巻の成立背景

——堀河天皇の追慕と天皇の代替わり——

丹 下 暖 子

一 はじめに

堀河天皇の崩御を悼み、追慕する『讃岐典侍日記』は、堀河から鳥羽へと、天皇が代替わりする時を捉えた日記である。特に「追慕の記⁽¹⁾」である下巻は、讃岐典侍が鳥羽天皇への出仕を求められるところから始まり、再出仕の日々の中で堀河天皇を回想、追慕してゆく。稿者はかつて、この下巻が「鳥羽天皇の代始めの記録」としての性格をも有すること、そこに「天皇の代替わり」という過渡期を記録しようとする姿勢が認められることを指摘した。ただし、これらは鳥羽天皇に関する記述を中心とした検討に基づくものであり、旧稿では取り上げなかつたことも多い。

本稿は、「追慕の記」としての下巻に見られるいくつかの特徴的な記述に注目することから始める。そして、天皇の代替わりを手がかりとしつつ、下巻の成立背景を探つてみたいと思う。

二 忠実、国信、雅俊への関心

下巻において注目すべき存在として、旧稿では鳥羽天皇を取り上げたが、堀河天皇の追慕を問題とする時、看過できない人物がいる。藤原忠⁽³⁾実と源国信、雅俊である。この三人は、讃岐典侍が特に共感を示す存在として登場する。

まず、忠実について見てみよう。以下に挙げるは、鳥羽天皇への出仕が本格的に始まつた嘉承三年（一一〇八）正月の記事の一節である。讃岐典侍が天皇に食事を差し上げているところに参内した忠実は、次のように声をかける。

御障子のうちに近やかにつりて、「いつよりさぶらはせたまふぞ。今よりはかやうにてこそは。そもそも思ひ出でられたまひて恋しきに、そのかみの物語してなぐさめん」などあら、いとかなし。われも人も、おなじやうにてこそものせさせたまふめれ。（嘉承三年正月三日 四四二⁽⁴⁾頁）

忠実は、点線部のよう、堀河天皇の「昔」が思い出され、慕われると述べる。それを受けて、傍線部のよう、讀岐典侍も忠実も「おなじ」状況にあることが記される。

さらに忠実の言葉は続く。

「思ひかげりしことかな。かやうに近やかに参りて、ものなど申ししことは、思はざりしかな。例ならではしまいしをりなど、御かたはらに添ひ臥させたまへりしをりに参りたりしかば、御膝高くなさせたまひて、陰に隠させたまひしをり、かやうならんことどもこそ思はざりしか。げに陰にも隠れさせたまひしかな。世はかくもありけるかな」とひかけて立たせたまひぬる聞くぞ、げにと心憂き。

(嘉承三年正月三日 四四三三頁)

病に臥した堀河天皇に添い臥しする讀岐典侍を忠実の目から隠すため、天皇が膝を高く立てたという思い出とともに、忠実は、すっかり変わってしまった今の様子に、「世はかくもありけるかな」と感概を漏らす。これを聞いた讀岐典侍は、傍線部のように忠実に同意し、「心憂き」とその心情を記す。

このように、初出仕の場面の忠実は、讀岐典侍と同じ状況にあり、共感される存在として登場する。そもそも、初出仕の記事には具体的な人物がほとんど登場せず、鳥羽天皇と忠実以外はすべて「人々」、「人たち」と表現され、ひとまとめに扱われる。そうした中で、堀河天皇の在りし日を回想し、追慕の思いを抱く忠実だけが特に描かれているのである。⁽⁵⁾

次に、源国信、雅俊に注目しよう。以下は、灌仏の日の記事の一節である。

灌仏の日になりぬれば、われもわれもと取り出だされたり。

〔中略〕御導師、水かけて、殿、参らせたまひてかけさせたまへれば、次第によりて、つぎつぎの上達部、かく。何ごとかはたがひて見ゆる。左衛門の督 源中納言、寄りてかくとて、いと堪へがたけにもの思ひ出でたるけしきなり。顔もたがふさまに見ゆる。あぢきなく、われもせきかねられて、おほかた例は外のかたも見じと思ひて、〔下略〕

(嘉承三年四月八日 四四七一四四八頁)

堀河天皇の時と変わらず、行方が宮まれてゆく中、点線部のよう、堀河天皇の叔父である源雅俊、国信の様子が描写される。昔を思い出し、悲しみを新たにする一人を見て、讀岐典侍も傍線部のように涙が抑えがたくなったと続く。忠実の場面と同様、堀河天皇のことを追慕する二人に讀岐典侍が共感を抱く形となっている。

以上、堀河天皇を慕う三人に讀岐典侍が共感を示す場面を取り上げた。このように讀岐典侍が周囲の人々と同じ思いであることを述べる場面は、上巻には頻出するものの、実は、下巻にはほとんど見られない。下巻で中心となるのは、周囲の人々と讀岐典侍の思いが一致しないことを描いた場面である。⁽⁶⁾

一例として、四月の衣がえの折のことを記した記事を挙げてみよう。

四月の衣がへにも、女官ども、例のことなれば、われもわれもと、身のならんやうも知らず几帳ども取りあへる、人見あれど、われは見まほしからず。これををかしとおぼしめたりしが、思ひ出でられて。（嘉承三年四月一日 四四七頁）女官たちが几帳を取り合う様子につけても、讃岐典侍は堀河天皇のことを思い出すので、「人見あへれど、われは見まほしからず」とある。「見る」人々に対し、讃岐典侍は見たいと思わないとする。「見る」という行為を軸として、人々と讃岐典侍が反する関係にある。

下巻は、上巻と異なり、讃岐典侍が周囲の人々に共感を覚える場面は少ない。そうした中に見られる忠実や国信、雅俊をめぐる記述は、特徴あるものとして注目されるだろう。本節では「追慕の記」としての下巻の有りようとも深く関わる存在として、讃岐典侍が特に関心を寄せた三人に注意しておきたい。

三 追慕の有りよう

前節では忠実と国信、雅俊に注目したが、堀河天皇を追慕する人々は他にも登場する。中でも下巻に三度も記される堀河天皇の月忌みは、かつて天皇に仕えた人々が集う追悼の場である。ただし、三人をめぐる記述とは趣を異にし、注意される。

まずは、嘉承二年（一一〇七）十一月の月忌みの記事を見てみよう。鳥羽天皇への再出仕が決まり、その準備に追われる中、讃岐典侍は堀河院に向かう。

参りたれば、人々、「あな、いみじ。例よりも曰たければ、『今日は、え参らせたまはぬなめり。ことわりぞかし。いそがしくおはしつらん』と申しあひたりけるに、おぼろけならぬ御こころざしかな。今日は」と、あはれがりあひたり。

（嘉承二年十一月十九日 四三六頁）

堀河天皇の崩御後も堀河院にとどまっている女房達の発言である。傍線部には、いつもより到着が遅れた讃岐典侍に対し、鳥羽天皇への出仕が決まり、忙しいから来られないのだろうと話していた、とある。これは、すぐ後に「おぼろけならぬ御こころざしかな」と続くことで、忙しくとも駆けつける讃岐典侍を賞賛する発言となる。しかし同時に、再出仕する讃岐典侍は、堀河院にとどまる女房達から特別視され、一線を画す存在として位置づけられてもいる。

次に月忌みのことが記されるのは、正月の初出仕後である。

正月になりぬれば、この月ならんからに欠かじと參りて、堀河院に参りたれば、人々、「いかで参りたまへるぞ。内にと聞きまゐらせつるは。この月はよもと思ひまゐらせしに」といひあはれたり。「いかでか参らざらん。つかうまつりはてんと思へば。いみじういそがしかりしだにも参りしを」といへば、「まことにかく欠かず参らせたまふことのありがたさ」などいひあひつつ、「つれづれのなぐさめに、法華經に花奉りたまふに」とて、いとなみあはれたるぞ、いとあはれに見ゆる。

（嘉承三年正月十九日 四四三～四四四頁）

鳥羽天皇への出仕が本格的に始まってからも月忌みに訪れた讃岐典侍に対し、女房達は、傍線部のように、再出仕した今は来られないものと思っていた、と述べる。ここでも、点線部のようにどんな時でも欠かさず訪れる讃岐典侍を賞賛する話へと展開するが、やはり女房達がまず意識するのは、讃岐典侍が鳥羽天皇に出仕する立場にあることである。

以上の二つの場面は、鳥羽天皇に出仕することになつても欠かさず月忌みに訪れる讃岐典侍を女房達が賞賛するという構造をとる。いずれの場面も、讃岐典侍の追慕の思いの深さを語ることに主眼があるのだが、堀河院にとどまる女房達は必ず讃岐典侍が鳥羽天皇に出仕する立場にあることと言及する。こうした女房達の言及は、讃岐典侍と女房達が、ともに堀河天皇を追慕する身であるものの、今は同じ立場にないことを明示する記述と捉えられるだろう。

さて、三月の場合、月忌みそのものについては、後三条院の崩御を悼む秦兼方の歌と、一条天皇の崩御を悼む上東門院の歌の引用が中心となる。

三月になりぬれば、例の、月に参りたれば、堀河院の花、いとおもしろし。兼方、後三条院におくれまゐらせて、いにしへに色も変はらず咲きにけり花こそものは思はざりけれ
とよみけん、げにとおぼえて、花はまことに色も変はらぬけしきなり。

昔の清涼殿をば御堂になさせたまひて、七月までは、宵曉の例時たえず、二十人の蔵人町、左近の陣など、僧坊になりたり。内裏にてありしところども、さびしげなる、見るにも、うせさせたまへりけん院のうちの、ひきかへかいすみさびしげなるを、御覽じて、

影だにもとまらざりける雲のうへを玉のうでなとたれか

いひけん

とよませたまひけん、げにとぞおぼゆる。

(嘉承三年三月十九日 四四五) (四四六) (貞)
兼方、上東門院の歌には、「それぞれ「げにとおぼえて」、「げにとぞおぼゆる」と、同様の表現が続く。讃岐典侍の共感が示されており、この二首に自身の堀河天皇追慕の思いを託す形となっており⁽³⁾いる。

三月は、月忌みに続けて行われた三十講についても記されており、ここには堀河院にとどまる女房も登場する。

宮の御かたに、三十講をおこなはせたまふとて、法華経を日に一品づつ講ぜさせたまふ。それ聞きに三位殿の参らせたまふに具して参りて、講などはてて、御前近く三位殿を召せばさぶらはる。宰相とてさぶらはるる人、「三位殿はいますこし近く参らせたまへ。典侍殿は今はばづかし」といふを聞かせたまひて、「それしもこそこころさし見ゆれ。見だてなく思ひ出でもなげに見ゆるところを、忘れず見ゆる」とおほせられもはてず、むせかへらせたまへる音の聞こゆるに、われ

も堪へがたし。暮れぬればまかでぬ。

(嘉承三年三月 四四六～四四七頁)

堀河天皇の中宮篤子が催す三十講に、姉の三位殿とともに出かけた場面である。中宮のもとに参上しようとしたところ、「宰相とてさぶらはるる人」が、傍線部のように、三位殿には近づくよう促す一方で、讃岐典侍に対しては「今ははづかし」とする。鳥羽天皇に出仕する今は気が引ける、というのである。

もちろん、この場面の主眼は、点線部の讃岐典侍の誠意を認める中宮の発言にあり、追慕の思いの深さが再確認される形となっている。しかし、「宰相とてさぶらはるる人」の発言は讃岐典侍が再出仕する身であることを意識したものであり、十一月、正月の月忌みと同様の場面と見なせるだろう。ここでもやはり、鳥羽天皇に出仕する讃岐典侍と堀河院にとどまる女房との隔たりが描かれているのである。

以上、月忌みの場面を中心に取り上げてきたが、いずれも類似した構造をとっている。堀河院にとどまる女房達は、讃岐典侍が鳥羽天皇に出仕する立場にあることを意識し、またそれ故に月忌みに訪れる讃岐典侍を賞賛するという形である。三つの場面で特に記されたのは、讃岐典侍の追慕の思いの深さとともに、再出仕する讃岐典侍と堀河院にとどまる女房達の立場の違いと言えるだろう。

こうした立場の違いに対する言及は、両者の追慕の有りようと関わってのものではないだろうか。堀河天皇追慕の思いは両者に

共通するものであつたはずだが、その有りようは一様ではなかつたと考えられるのである。

次に挙げる天仁元年（一一〇八）八月の内裏遷幸にまつわる一節が、追慕の有りようを問題とするにあたり、示唆的である。

御溝水の流れに並み立てるいろいろの花ども、いとめでたきなかにも、萩の色こき、咲きみだれて、朝の露玉をつらぬき、夕べの風なびくけしき、ことに見ゆ。これを見るにつけても、御覽せましかば、いかにめでさせたまはましと思ふに、
萩の戸におもがはりせぬ花見ても昔をしのぶ袖ぞつゆけ
き

と思ひるたるを、人にいはんも、おなじ心なる人もなきにあはせて、ことのはじめに漏り聞こえん、よしなければ、承香殿を見やるにつけても、思ひ出でらるれば、里につくづくと思ひづけたまはんとおしはかりて、これを奉りしかば、

〔思ひやれ心ぞまどふもろともに見し萩の戸の花を聞く

にも

思へば、さておなじさまにてし歩かせたまふだに、さおぼすなり、まして、つくづくとまぎるかたなく思ひづけんは、おしはかられて」ぞある。かくてあるしもぞ、いますこし思ひ出でらるる。（天仁元年八月二十二日 四五九～四六〇頁）

内裏遷幸の翌朝、讃岐典侍は鳥羽天皇に請われて内裏を案内する。かつての日々を思い起させる情景に追慕の思いを深くした讃岐典侍は、「萩の戸に」の歌を詠み、自身と同じように堀河天

皇のことを追慕する人を求めて里居の知人に送る。しかし、返事は点線部のように、里居の方方が気持ちが紛れる折もなく、昔を思い続けているというものであった。それに対し、讃岐典侍は傍線部のように、再出仕する自身の方がより昔が思い出されるのだ、とする。

ここには、里居と再出仕という、二つの立場による追慕の有りようが端的に表れている。里居の知人は昔を「思ひづけ」るのに対し、再出仕する讃岐典侍は今が契機となって昔を思い出すのである。堀河天皇を追慕するという点では同じであっても、立場によってその有りようは異なる。これは、月忌みの場面にも当てはまるところだろう。月忌みの場面で繰り返し言及される立場の違いは、讃岐典侍と女房達それぞれの追慕の有りようを反映したものなのである。

このように見てくると、下巻で問題となるのは単なる堀河天皇追慕の思いではなく、その有りようと言えるだろう。讃岐典侍自身の追慕の有りようは、内裏遷幸の翌朝の記事に顕著なように、再出仕する「今」を契機とするものであったと考えられる。前節では、讃岐典侍が特に関心を寄せる三人を取り上げたが、この三人も鳥羽天皇に出仕する「今」を契機として昔を思い出す人々であった。讃岐典侍が堀河天皇を追慕するにあたって、「今」という視点を有する側に属していたことは明らかである。

そして、この「今」という視点こそが、堀河院にとどまる女房達や里居の知人には持ち得ない、再出仕する讃岐典侍の特質で

あつた思われる。そもそも、下巻は「今」を軸として構成される点に特徴がある⁽¹⁾が、あらためてその重要性が窺われる。次節では、この「今」に注目して、下巻を考えてみたい。

四 「今」への視点と堀河天皇の追慕

ここまで、下巻において堀河天皇の追慕を問題とする時、特徴的と思われる記述をいくつか確認してきた。そこから見えてきたのは、鳥羽天皇に出仕する「今」という視点の重要性である。本節では、この「今」に注目して、「追慕の記」としての下巻を捉え直してみよう。取り上げるのは、「追慕の記」の中核をなす堀河天皇の回想記事である。

回想記事の様相は、下巻前半と後半で大きく異なる。まずは前半に見られる例を挙げる。

昼つけて、殿参らせたまひて、人々ゐなほりなどすれば、ものを参らせさして立たんも、おとなにおはしまいしにぞ、さやうのをりもわかず立ちしか、また、おとなしうなども告げさせたまひしか、これは、うちすてて立たば、よきことやいはれんずると思へば、なほゐたるも、かくこそありがたかりけることを、心にまかせて過ぐしけん年月を、いかで思ひ知らざらん。

（嘉承三年正月三日 四四一～四四二頁）

右は、二節でも取り上げた正月の初出仕の一節である。鳥羽天皇に食事を差し上げているところに忠実が参内した際、まず傍線部のように、堀河天皇に出仕した昔は食事中であっても席を立つ

ことができたと回想し、続けて、点線部のよう席を立つことができない「今」に言及する。下巻前半には、こうした鳥羽天皇に出仕する「今」と対比する形で堀河天皇を回想する場面がいくつか見られる⁽¹⁾。

対比を通して讃岐典侍が認識するのは、波線部にあるように、

堀河天皇のありがたさである。これは、鳥羽天皇に出仕することによってあらためて得られる感慨だろう。「今」との対比によって、かつての堀河天皇に出仕した日々を捉え直し、その意味を新たに見出すという構造である。

続いて、下巻後半で中心となる回想記事は、讃岐典侍と堀河天皇の親密さを語るものである。下巻前半と比べ、回想に費やされる分量も多くなる。

一例として、五節の嘗みを鳥羽天皇と見る中、堀河天皇と二人で過ごした雪の朝のことを回想する場面を見てみよう。

雪の降りたるつとめて、まだ大殿ごもりたりしに、雪高く降りたるよし申すを聞こしめして、その夜御かたはらにさぶらひしかば、もろともに具しまるらせて、見しつとめてぞかし、

いつも雪をめでたしと思ふなかに、ことじめでたかりしかば、

[中略] 女の声にて、透垣のもと近くさし出でて見るけはひ

して、「あな、ゆゆしの雪の高さや。いかがせんずる。裾も

え取り行くまじきはとよ」といひしを聞かせたまひて、「こ

れ、聞け。いみじき大事出で來にたりとこそ思ひあつかひた

れ。雪のめでたさ、御目さめる心地する」とて、笑はせた

まひしなど、思ひ出でられて、つくづくと思ひむすぼるるも、ただも御覽じ知らず、「あのうちへくもやり持ちたるもの、こはせて。いで、いで。出で行かぬさきにこはせよ。それ、いへ、それ、いへ」と引き向けさせたまへば、うつくしさによろづさめる心地す。

(天)元年十一月 四六四(四六六頁)
中略部分では、起き出した姿のまま、ともに雪を眺めた甘美な思い出なども語られ、かなりの分量が回想に費やされる。それでも、思い出のまま十一月の記事が終わることはない。傍線部のように鳥羽天皇の言動により回想から覚め、現実、すなわち「今」に立ち戻る。

これは、他の回想記事にも共通する。たとえば、嘉承三年六月の記事などは、「六月になりぬ。暑さ所せきにも、まづ、去年のこのころは、こともなく御心地よげに遊ばせたまひて」(四五〇頁)と、冒頭からすぐに回想が始まることで、一年前の堀川の泉見物と扇引きの話が記事の大部分を占めるが、その締めくくりでは、やはり次のように「今」に言及する。

そのをりは何ともおぼえざりしことさへ、いかでさはしまるらせけるにかとなめげに、今日は、ありがたくおぼゆる。

(嘉承三年六月 四五一页)

当時は何とも思わなかつたことが、「今日」ありがたく思われる、とある。鳥羽天皇に出仕する「今」があるからこそ、当時は分からなかつた堀河天皇のありがたさに気づくというのである。

回想が中心となる六月の記事においても、「今」のもつ意味は大きい。

以上、「追慕の記」としての下巻において、大きな位置を占める回想記事を確認してきたが、そこには必ず「今」が入り込む。「今」があることによって、堀河天皇に出仕した日々が捉え直され、価値あるものとして発見されるのである。これは、「今」という視点を有する讃岐典侍の追慕の特徴と言えるだろう。

そもそも、この「今」に対する言及は、『讃岐典侍日記』の冒頭から始まっている。

五月の空もくもらはしく、田子の裳裾もほしわぶらんもことわりと見え、さらぬだにものむつかしきころしも、心のどかなる里居に、常よりも昔今のこと思ひつけられて、ものあはれなれば、端を見出だしてみれば、雲のたたずまひ、空のけしき、思ひしり顔にむら雲がちなるを見るにも、「雲居の雲」といひけん人もことわりと見えて、かきくらざる心地ぞする。

(序 三九一頁)
上下巻を通しての序の冒頭である。続く部分では、堀河天皇に出仕した八年間が忘れ難く、「なぐさむやと、思ひ出づることとも書きつづくれば」(三九二頁)と、執筆動機なども記されている。

こうした日記全体の指向性を示す序の冒頭で、傍線部のように「昔」だけでなく「今」への言及がある。「昔」とは堀河天皇に出仕した八年間を、「今」とは鳥羽天皇に出仕する現在を、それぞ

れ指すと解されるだろう。鳥羽天皇に出仕する「今」も「昔」とともに「思ひつけられ」る対象となっているのであり、日記における「今」の重要性は明らかである。⁽¹²⁾

以上、堀河天皇の回想記事を中心に見てきた。鳥羽天皇に出仕する「今」は、構成面のみならず、「追慕の記」としての下巻の特徴である回想記事と密接に関わるものである。讃岐典侍の堀河天皇追慕は、「今」との関わりの中で堀河天皇に出仕した日々を捉え直し、その意味を見出そうとするものであつたと言えるだろう。こうした「今」という視点は、堀河と鳥羽という二人の天皇に出仕した讃岐典侍ならではのものと思われる。

そして、「今」を通して見ることにより発見されるのは、堀河天皇のありがたさである。これを書き記し、堀河天皇という存在を「今」に示してゆくのが、『讃岐典侍日記』の下巻と捉えられるだろう。讃岐典侍の堀河天皇への思いは、回想記事に語られる二人の親密な関係に明らかなように、私的な面によるところが大きい。しかし、「追慕の記」としての下巻でとられた方法は、ただ追慕の思いを披瀝するのではなく、「今」を意識し、その中に堀河天皇を位置づけてゆくものなのである。

五 おわりに

実際に多くの人々が、堀河天皇の崩御を悼み、追慕した。本稿でも言及した源国信は『源中納言懷旧百首』を編み、勅撰集にはさまざま人々の哀傷歌が残る。また、『中右記』には、堀河天皇

追慕の夢の話が幾度も記されている。

そうした中で成立した『讃岐典侍日記』には、夢の話は登場せず、また和歌も多くはない。夢や和歌の代わりに、「追慕の記」を編むにあたって讃岐典侍が試みたのは、鳥羽天皇に出仕する「今」との関わりの中で堀河天皇を位置づけ、そのありがたさを語ることであったと言えるだろう。これが、天皇の代替わりを経験し、二人の天皇に出仕することとなった讃岐典侍が持ち得た視点であったと思われる。

『讃岐典侍日記』の、少なくとも下巻は、鳥羽天皇への出仕がなれば書かれることのなかったものと思われる。こうした意味において、天皇の代替わりは『讃岐典侍日記』の形成に深く関わるものであったと言えるだろう。

注

- (1) 石井文夫校注、新編日本古典文学全集『讃岐典侍日記』解説（小学館、一九九四年）。
- (2) 拙稿「天皇の代替わりと『讃岐典侍日記』—鳥羽天皇から見る下巻の位置づけ」（『皇統迭立と文学形成』和泉書院、二〇〇九年）。
- (3) 忠実については、中村成里「『讃岐典侍日記』における天皇と攝関—執政者藤原忠実の肖像」（『国文学研究』一四六、二〇〇五年六月）が、「『讃岐典侍日記』における忠実の位置づけを詳細に論じている。
- (4) 「『讃岐典侍日記』の引用は、新編日本古典文学全集に拠り、引用本文の下に頁数を記す。

(5) なお、『中右記』によると、この日、忠実は参内していない。

(6) 拙稿『『讃岐典侍日記』上巻の一側面—天皇の代替わりという過渡期をめぐって—』（『詞林』四五、二〇〇九年四月）において、上巻には、堀河天皇の発病・崩御に際し、周囲の人々が嘆き悲しむ様子を描写し、それに添える形で、讃岐典侍自身の悲しみを示してゆく場面などが見られるなどを指摘した。

(7) 例として挙げた四月の衣がえ以外にまとまつたものとして、鳥羽天皇への出仕を要請された折（嘉承二年十月）、内裏遷幸（天仁元年八月）、五節の頃（天仁元年十一月）の場面などがある。日記の追記部分及び、本節で取り上げる人物を除くと、一周忌に登場する女房達、讃岐典侍と贈答を交わした大和殿、周防内侍などが挙げられる。

(8) なお、勅撰集などに入集する著名な先行歌を一首そのまま引用する例は、この他にも下巻に四首見られ、いずれも兼方、上東門院の歌と同様の形となる。上巻と異なり、讃岐典侍が共感を寄せる存在が少ない下巻において、これらの歌は讃岐典侍が追慕の思いを託し、表現する一つの方法として機能していると思われる。

(9) 上下巻の時間のあり方を問題とする石楚敬子「『讃岐典侍日記』における時間の構造」（『日記文学・作品論の試み』等間書院、一九七九年）は、下巻について、堀河天皇に出仕した八年間を直接記さず、「再出仕後の現在を契機として連想される範囲で帝を語りうとしている」とする。

(10) 前掲注(2)拙稿において、鳥羽天皇の描写に注目する形で取り上げた。

(11) 津本信博「『讃岐典侍日記』の成立—その執筆年次と契機」（『日記文学の本質と方法』風間書房、一〇〇一年、初出は一九八六年）も、この序に見られる「今」に注目し、「かけがえのない堀河帝との愛を失った悲哀が、帝との別離の日が日一日と遠のい

てゆくさまが動かすことのできない事実としてむなしく受けとめざるを得ない作者の心境が微妙に文章に反映している」とする。

(たんげ・あっこ 本学大学院博士後期課程)